

あかしっ子 11月号

明石市立明石小学校

子どもの能力を引き出すために

大発明家 トーマス・エジソンの逸話です。

ある日、先生が「ここに1個の粘土の玉があります。そして、こっちにも1個の粘土の玉があります。両方合わせると何個になるかな？」と問われて、エジソン少年は答えました。「1個の粘土と1個の粘土を合わせて混ぜて1個の粘土になるだけだ。」と、すると、先生は怒って「おまえの脳みそはどうかしている。」と言ったそうです。また、エジソン少年は、授業中に「なぜ？」を連発し、担任の先生から「君の頭は・・・」と突き放され、校長からわずか3ヶ月で退学を勧められて中退したそうです。その後は、教師であった母から勉強を教わったそうです。その母は、好奇心旺盛のエジソンのために地下室に様々な化学薬品をそろえ、エジソンは、そこで科学実験に没頭したと言われています。1877年、エジソンは蓄音機の実用化で名をはせ、電話やレコードプレーヤー、電灯照明などを商品化したのだそうです。エジソンは電球の発明者ではないのですが、何でもやってみる性格のおかげで、たまたまあった扇子の骨を電球のフィラメントに試したことから、京都の竹を使うことで、それまで45時間しかもたなかった電球を1000時間以上点灯するまで伸ばしました。だから「発熱電球の発明者」と呼ばれるようになったそうです。

エジソンの母は、エジソンの「なぜ？」という疑問にはとにかく丁寧に説明していたと言われています。これは、「子どもの能力を引き出す上でも大事な方法である」と現代も言われているやり方です。

私たちの生活を潤す様々な改良をもたらしてくれた発明王エジソンを生み出してくれたのが、この母のエジソンへの接し方だったのではないのでしょうか。

ところで、もしも、自分の前にいる子どもが、例え簡単なことでも「何かを10回中9回成功させた」としましょう。その時に「なんで、9回もできたなら、あと1回ぐらいできなかつたんや。」と言いますか、「すごいね。9回も成功したんだね。頑張ったね。」と言いますか。言われた時の子どもの心を想像してみていただければ、自ずとどちらがいいかはわかりでしょう。子どもの周りにいる親や先生といった大人が、ちょっとした心の持ち方、言葉の選び方、受け入れ方によって、その後の子どもの人生を大きく変えることができるのではないのでしょうか。

どちらの話も、子どもの周りにいる親や先生といった大人が、どう子どもに接するかで、その子の能力をダメにしてしまうのか、あるいはしっかり伸ばしてやることができるのか、それによりその後の子どもの人生を決めるのではないのでしょうか。だから、私たち教師も保護者におかれても、「ほめて育てる」重要性をしっかりと心に留めて、子どもの能力を信じて、どう方向性を示してやるかを考えながら、子どもと接していくことを大切にしていきたいと考えています。

どの子も長い間、頑張って練習してきた成果を披露する11月3日の音楽会においても、こんな気持ちで、導き、見守り、受け入れ、温かい声をかけてあげられれば、子どもの素晴らしい笑顔に出会える日になるのではないのでしょうか。これからも子どもの未来を信じて、先生と保護者が共に子どもを見守る取組を続けていけるように、ご協力をよろしくお願いいたします。

校長 玉田 絹夫